2024年10月20日(日)
中国新聞SELECT掲載

JICAだより

マレーシア
山田勇人さん(50)
岡山市中区

25年前の経験 今でも糧

私がJICA海外協力隊に日本語教師として参加したのは25年以上も前のことだ。大学で日本語教育を専攻した私は卒業と同時に協力隊員としてマレーシアの中高等学校に派遣された。

一年中暑いマレーシアの学校の冷房もない教室で、13歳から17歳までの学生たちに日本語や日本文化を紹介していた。四半世紀も前のことなどと思われるかもしれないが、協力隊の活動は今も鮮明に頭に浮かぶほど自分の人生にとって大きな出来事だった。

この協力隊のキャリアはその後の私の人生にも大きな影響を与えた。帰国後、さまざまな機関で日本語教育に従事してきたが、先々の機関には必ずと言っていいほど協力隊の経験者がいた。派遣国、時期、年齢も違うのに、同じ協力隊出身と分かると途端に親近感が湧き、さっき会ったばかりなのに、まるで長年苦楽を共にした同志のような気分になることもあった。

ありがたいことに、協力隊経験が縁となり、日本語教師として採用が決まったこともあれば、採用の面接中に面接官が「実は私も協力隊経験者でして…」と切り出し、協力隊時代の思い出話で面接が終わってしまったこともあった。

現地の日本語教員に囲まれながらワープロを打つ山田さん（左から2人目）

協力隊に参加したことは日本をよりよく知るきっかけになった。「日本はいい国か」。そんなことは日本にいたら分からない。日本を飛び出し、現地の人と生活をしてこそ日本の良い面も悪い面も見えてくる。こんな経験をさせてくれた協力隊には感謝しかない。

今、私は岡山にある山陽学園大で日本語教員養成の仕事に携わっている。学生の中には協力隊に参加し、海外で日本語を教えることを希望する学生もいる。私がした貴重な経験をぜひ彼らにもさせてあげたい。それが協力隊経験者としての今の私の使命だと思う。